



原油が6日続伸

原油は6日続伸。11日の東京外国為替市場で円が一時1ドル=145円台後半まで売られ、円建てで取引される国内原油先物は割安とみた買いが優勢だった。ウクライナ情勢が緊迫化しており、ロシア産エネルギーの供給減少を不安視した買いも集まりやすかった。

<ドバイ原油・11日午後、上昇 94.80ドル前後>

原油でアジア市場の指標となる中東産ドバイ原油のスポット価格は11日午後、上昇した。取引の中心となる12月渡しは1バレル94.80ドル前後と前週末に比べ1.40ドル高い水準で推移している。



サウジ原油調整金、需要減警戒で主要油種同額 11月積み

サウジアラビア国営石油のサウジアラムコは11月積みのアジア向け原油の代表油種のアジア向け調整金を据え置いた。石油輸出国機構（OPEC）とロシアなどで作る「OPECプラス」は5日に11月以降の大幅減産を決定したものの、世界景気の減速で需要の鈍化懸念が強く調整金の引き上げは見送った。アジア市場の競合激化への警戒も一因となったもようだ。

日本の石油会社がサウジと結ぶ長期契約の価格は、ドバイ原油とオマーン原油の月間平均価格を指標とし、油種ごとに調整金を加減して決まる。

代表油種「アラビアンライト」は1バレル当たり5.85ドルの割り増しと、10月積みから据え置いた。軽質の「エキストラライト」は6.35ドルの割り増しと、0.1ドル（1.6%）引き下げた。

重油を多く含む中質・重質原油はそれぞれ前月から0.25ドルの小幅な引き上げとなり、軽質油と中・重質油との調整金の値差が縮小した。

主要油種の調整金は9月まで引き上げが続き、10月に引き下げに転じた。各国の中央銀行の利上げ加速で世界経済が後退し、原油需要が鈍るとの警戒が高まっていることが背景にある。

需給の緩和観測と原油相場の下落を受け、OPECプラスは来月から日量200万バレルの大幅減産に踏み切ると決めた。ただ、実質的な減産幅は打ち出した目標を下回るとみられており、需給が緩むとの警戒感は完全には払拭されていない。

市場参加者の間では、ロシアから割安な価格で大量の原油を調達している中国の精製業者が年後半にかけて石油精製品の輸出を増やすとの見方が出ている。

サウジアラムコが減産の一方で調整金を据え置いた背景には、競争が激化する中でアジア市場でのシェアを維持しようとする狙いもあるとみられる。

2022年11月積みの サウジ産原油の調整金

（1バレルあたりドル、+は割増金、-は）
割引金、カッコ内は前月比増減額）

スーパーライト	+9.15(横ばい)
エキストラライト	+6.35(-0.1)
ライト	+5.85(横ばい)
ミディアム	+4.00(+0.25)
ヘビー	+2.45(+0.25)



ESGとは コロナ後、「社会」に関心

▼ESG 「Environment（環境）」、「Social（社会）」、「Governance（企業統治）」の頭文字を取った略語。これまで企業の社会貢献は利益の一部を還元する意味合いが強かった。ESGは環境や社会への配慮、企業統治の向上を通じて企業価値の拡大を目指す点で違いがある。

国連が2006年、機関投資家にESGの視点を盛り込んだ投資を求めたこともESGが注目される契機になった。これまでは脱炭素など「E」にあたる環境問題への取り組みを強化する企業が多かった。新型コロナウイルス禍で従業員や取引先への配慮を含めた社会問題の「S」への対応に注目が集まっている。

企業がESGに積極的に取り組むとブランド力の向上や持続的な成長が可能になる。企業全体でESGへの取り組みを進めるため役員報酬にESGの成果を反映させる動きが広がる。Zホールディングスは社会貢献の達成度合いに応じて賞与を最大5%増減させる。ブリヂストンもESG対応を報酬に反映している。



円下落、一時146円台に 24年ぶり安値を更新

12日の外国為替市場で円が対ドルで下落し、一時1ドル=146円を下回って1998年8月以来およそ24年ぶりの円安・ドル高水準を付けた。強い雇用情勢を背景に米金利が上昇し、日米金利差の拡大を見込んだ円売りの動きが広がっている。ウクライナ情勢の緊迫化で基軸通貨のドルに資金が流れている面もある。

政府・日銀は円安抑制のため、9月22日に円買い・ドル売り為替介入に踏み切った。為替介入から14営業日で円相場は安値を更新した。市場では再度の為替介入に警戒感も強まっている。

9月22日には日銀の黒田東彦総裁が記者会見で金融緩和を続ける姿勢を鮮明にしたことで一時1ドル=145円90銭まで円安・ドル高が進行。政府・日銀は円安進行を抑える目的で2兆8000億円の円買い・ドル売り為替介入を実施し、円相場は一時140円台前半まで上昇する場面があった。



原油、5円超す大幅上昇

週間コスト

5円超す大幅上昇

回80
復円

円安に「服感」も3週ぶり反発

本紙算定による円建て週間原油コスト（ドバイ・オマーン平均）は、4～10日が前回算定時から5円70銭、5～11日が6円40銭ほど引き上がった。円相場の下落基調には「服感」がみられたものの、原油価格の上昇を映して3週ぶりに反発した。上げ幅が5円を超えるのは8月下旬以来およそ1カ月半ぶりで、2週ぶりに80円台を回復している（別表参照）。

てを削減するという近視眼的な決定に失望している」と言及。エネルギー価格に対するOPECの影響力を弱めるための措置について、議会と協議する考えも示した。

指標原油は4～10日から8日30日（10・2）期間平均の上げ幅はWTIが前回算定時から8日30日（10・2）に比べて、WTIが期

週間原油コストの推移

期間	原油相場		為替(▲は円高)		円建て原油コスト	
	円/バレル	前週比	円/ドル	前週比	円/%	前週比
8/30～9/5	96.02	▲3.09	140.43	2.17	84.81	▲1.37
8/31～9/6	94.18	▲6.07	140.77	2.25	83.38	▲1.36
9/6～9/12	90.89	▲5.13	143.90	3.47	82.26	▲2.55
9/7～9/13	90.37	▲3.81	144.35	3.58	82.04	▲1.34
9/13～9/19	92.05	1.16	144.37	0.47	83.58	1.32
9/14～9/20	91.62	1.25	144.56	0.21	83.30	1.26
9/20～9/26	89.90	▲2.15	144.89	0.52	81.92	▲1.66
9/21～9/27	88.86	▲2.76	145.19	0.63	81.14	▲2.16
9/27～10/3	86.22	▲3.68	145.66	0.77	78.99	▲2.93
9/28～10/4	86.79	▲2.07	145.70	0.51	79.53	▲1.61
10/4～10/10	92.45	6.23	145.56	▲0.10	84.64	5.65
10/5～10/11	93.69	6.90	145.83	0.13	85.93	6.40

(注)原油はドバイ、オマーンの平均。為替レートはTTS。

しをみせた。大手銀行TTSレート平均は祝日の10日を除き4～10日が前回算定時から10円高ドル安の1日145円56銭、5～11日が13円円安ドル高の1

円台を底に下値は堅かった。金融機関関係者は「為替介入だけで円安ドル高の流れは変わらないが、政府・日銀の姿勢を示すことにはつながった」との見方を示している。